

交流

〈大会発表〉

◆佐藤保 入澤達吉博士と『雲莊詩存』—近代日本知識人と漢詩— 医学博士入澤達吉（一八六五—一九二八）は、

日本の近代医学開拓者の一人である。彼は東京帝国大学医学部内科の医局長、同大学医学部附属医院長、医学部長、大正天皇侍医頭などを歴任した。

その生涯は、慶應元年（一八六五）正月五日、新潟県南蒲原郡今町永閑寺門前（現在は長岡市中之島町）の寓居に生まれ、明治七年（一八七四）数えの十歳のとき蘭医の父恭平が急逝、九年（一八七六）には母とともに叔父の池田謙齋（父の弟）を頼って上京、翌十年東京帝国大学医学部の予科募集試験に合格し、ここから彼の医師生活が始まる。

当時の医学部総理は叔父の池田謙齋、外科はシュルツ、内科はベルツが教えていた。二十二年（一八八九）医学部卒業後、ベルツの無給助手、ドイツ留学を経

て、三十五年（一九〇二）ベルツの退職後、入澤内科を設立、日本内科学会を立ちあげた。彼は大学教授在任中に清国高官の依頼でその息子の診療のために南京まで行ったり、また外務省の囑託により中国各地の視察をしたりして、中国との関係を深めた。

入澤は上京直後に下谷の日尾竹陰（直子）の塾に入つて漢詩を学び、ついで馬杉雲外の塾に通い、医学の勉強のかたわら作詩を続けた。昭和七年（一九三二）中国・上海で刊行された彼の漢詩集『雲莊詩存』には二五〇余首の作品を収める。その中にはドイツ留学中の見聞を詠じた詩篇や日清戦争・日露戦争などの時局を写す作品など、興味深い作品が少なくない。また、入澤は東京帝国大学を定年退官する際に、広く友人たちに自作の「秋懷詩」三首への唱和（次韻）を求めて編纂した『秋懷唱和集』がある。昭和二年（一九二七）に刊行された同書には医師仲間からの唱和が多く、漢詩が当時の知識人の教養として重んじられていたことがよく理解できるのである。

〈例会発表要旨〉

◆鈴木基子 張愛玲研究の現在—渡米後を中心に— 張愛玲について研究したこれまでの九本の拙文を概観し、中でも書簡からみた米国での生活実態についての分析を中心に紹介するとともに、修正点と今後の研究の方向を示した。

先行研究を簡単に整理した上で、主として、渡米後の書簡から考察した米国での生活実態について、渡米理由、居住地と仕事、健康状態、米国各地の居住地の写真、英文著作の挫折と出版に難儀した作品、寡作説と隱遁説の否定、張愛玲の性格について述べた。

張愛玲の米国での生き方を通して、多言語多文化社会で一移民として共生を図る努力をしていたこと、決して寡作ではなく「自分で選んだ孤独」の中で生き抜いたこと、健康状態が非常に優れなかったこと、信頼できる極少数の友人と文通で連絡を取っていたこと、隱遁・隱居生活ではなくて、ひたすら精力的に執筆活動に没頭して人生を全うしたことなど従来のイメージと異なる作家像を示した。

◆西野由希子 『也斯の香港―』後植民

食物與愛情」を読む。香港の詩人・作家、也斯は、創作の初期から「食」をテーマに多くの作品を書いたが、その集大成と言えるのが、小説集『後殖民食物與愛情』である。二〇〇九年に出版された単行本には、九八年から〇八年までに書かれた十二編が収められ、文学賞などを受賞した。その後、作者は作品の入れ替えや加筆修正を行い、二〇一二年に「修訂版」を刊行している。この小説集を中心に、「現在」の視点から「香港」を描こうとして改訂を続けた也斯の創作の態度について発表した。

也斯の関心は「文化の越境」から「対話」へと深化していき、作品に個人の「思い」や「思い出」をより強く書き込むように変化したと考える。本小説集でも、実在の飲食店、そこで食べる料理、流行、事件、風潮など、返還前後の実際の香港が具体的かつ詳細に記録・記載されるとともに、也斯本人の体験や感情が、登場人物たちの「個人の物語」として描かれるところに本作の構造の特徴がある。

◆鄭月超 「詠懷」と「言志」―なぜ

阮籍詩群が「詠懷」と呼ばれたのか。文献資料上において、阮籍詩と「詠懷」が結びつくのは、おおよそ梁（江淹）の時代である。いっぽう、『芸文類聚』などでは、阮籍「詠懷詩」を「言志」の部に収め、阮籍詩は「詠懷」というタイトルでありながら、「言志」に準ずるもの、あるいは、同じものとして捉えられている。「詠懷」と「言志」の本旨は「表出」という点において重なり、大きく捉えれば、両者は同じ枠組み内にある表現であるといえる。しかし、「詠懷」と「詠懷」が結びついた梁代において、とりわけ多様に展開する文学作品において、それぞれの作品、詩人の個性、特徴を捉えようとするとき、「言志」はより狭義の、隠遁の「志」がまず意識されていた。一方、「詠懷」は個人の胸のうちを言葉に置き換える行為がまず意識された表現である。同じ「表出」を言い表す文学表現でも、難解で晦渋として知られる阮籍詩は「言志」ではなく、「詠懷」によって名づけられたのではないかと考える。

◆大戸温子 『日本閨媛吟藻』の研究

『日本閨媛吟藻』は明治十三年に刊行された女性漢詩選集である。幕末から明治初期にかけて活躍した五十四名の女性詩人による漢詩を集めている。清末の学者俞樾は『東瀛詩選』の中で、当時日本の女性に和歌を作る者はあるが、漢詩を作る者は少ないこと、また発表されている作品の数が少ないことを指摘し、このような状況の中で『日本閨媛吟藻』は女性詩人の作品を多く集めた詩集として貴重な存在であることを述べている。しかし『日本閨媛吟藻』についての研究は、日本において管見の限り極めて少ない。今回の発表では、『日本閨媛吟藻』の書誌情報について、編者水上珍亮について、収録されている作品の作者についての報告と、『日本閨媛吟藻』の存在意義について、私見を述べさせていた。また今後に、『日本閨媛吟藻』に集められた女性詩人たちのネットワークや活動の様子を追いながら、男性の分野であった漢詩の世界に女性が入り活躍して行く様子を見ていきたい。

◆阿部沙織 一九五〇年代の凌叔華

指摘した。

一九二〇—三〇年代の活躍が主に取
り上げられることの多い凌叔華の、渡
英後一九五〇年代の文学活動に注目
し、その創作動機や環境などを探った。

◆田禾 句末副詞「还／都」の语义功
能 本文讨论了在句子末尾出现的副词
「还」和「都」的语义变化，尝试解释了
二者可以在句尾出现的条件及动因。

五三年に発表した自伝的小説『Ancient
Melodies (古韻)』の発表に至るまでに
は、かねてより親交のあった英国の文化
サロン、ブルームズベリー・グループの
多大なる助力があった。発表では未発
表書簡の中で凌叔華がケンブリッジ大学
ニューナムカレッジで聴講する意思を示
していた事実なども提示しながら、作
家が渡英当時、積極的にブルームズベ
リー・グループにコミットし、新たな環
境で文学者としての位置を確立しようと
試みた過程を辿った。『古韻』はヴァー
ジニア・ウルフの「思うがまま書くよう
に」というアドバイスや、見世物ではな
い本当の中国を描きたいという作家自身
の決意から生まれた。しかし凌叔華はそ
の執筆にあたって、英国の読者の期待に
沿う「中国像」を提示せねばならないと
いうジレンマにも陥ったのではないかと

沿用陸陆明先生提出的易位概念，指出

「还」发生易位的最根本的条件是带有主
观色彩的语义。原来单纯表示客观语义的
要添加其他小句，以使「还」能发挥元
语增量的用法。「还」的易位句主要集中
在表「仍然／持续」的义项。句尾的「还」
跟「呢」共同起作用，用眼前的事实来
提醒谈话对方尚未具备所预期的条件（如
『老师没来呢还』／『我在加班呢还』），
从而表达一种拒绝、辩解，这是「还」发
生易位现象的最主要的用法。之后对于
「都」的易位现象分析指出，易位发生最
多见的是已经义的「都」。结论是这两个
副词各自最容易发生易位现象的都是运用
反预期效果而表达意料之外的义项。不同
描述的是已经实现的事实。
◆鄭文琪 表可能的情态动词“会”指
向将来时的用法考察 许多语言学者认为

汉语是不具时制的语言，汉语里表达“时”
的概念任务由“体”和“情态”来承担。
例如…（1）这条快死了。（2）这条
鱼会死。上述二句皆表示将来可能发生
的事件。例（1）句中的副词“快”和
体助词“了”用来描述即将发生的事件。
例（2）句中的认识情态动词“会”则
是说话者对事件可能发生的判断。根据王
（2007），“会”的基本语义特征是非现实
性，由于将来时具有不确定性，因此当事
件发生在未来时，“会”的使用是无条件
的。反之，笔者也注意到在表将来时的句
子里，有些时候“会”是不可省略的。本
发表将透过例句考察、分析和“会”同现
的谓语，以阐明“会”指向将来时的用法。
◆新沼雅代 横浜国立大学における中
国語履修者の学習方略観と習得観
— 学生が考える「中国語ができるよう
になるには」「中国語ができる」とは—
学生は、どう勉強すれば中国語ができ
るようになるかと考え、また中国語がで
けるとは具体的にどのようなイメージで捉
えているのか。調査によると、中国語が
できるとは中国語が話せることで、具体

的には中国語でコミュニケーションや意思疎通ができ、日常会話ができるレベルだと学生は考えている。

国語において内発的価値と自己効力感、学習方略は正の相関がある（伊藤1996）。中国語を履修する学生は、自分の用いる学習方略が効果的かどうかを授業で検証する機会がない。教員は、学習方略自体の指導や学習方略を高めたり修正したりする介入が必要である。さらに、学習方略と課題等をリンクさせて努力が結果につながるようにし、自己効力感を高めさせる工夫が必要である。

今後、各レベルのクラスにおいて、「話せる」ことを到達目標とし、かつ自己効力感を高める課題や授業内活動を実践して、中国語学習における学習方略と自己効力感、内発的価値の相関を検証したい。

〔修士論文要旨〕

◆趙亜男 唐代の茶詩における茶会と茶宴の比較研究 二十世紀八十年代以来、中国の喫茶文化の研究の進展に伴い、喫茶文化の場である茶会と茶宴が、

研究者の注目を集め始めた。そして、今までの研究成果において、茶会と茶宴は同視されていた。しかし、盛・中唐の茶詩を通して見ると、茶会と茶宴が違ってもとして描かれているのがよく分かる。本論文では、喫茶文化の隆盛に拍車をかけた唐代における喫茶文化の場である茶会と茶宴に関する茶詩の分析を通して、茶会と茶宴の有り方を再現し、区分的意識を持ちながら両者の比較研究を行ってきた。分析の結果、共通点があるにもかかわらず、創作時期はそれぞれ盛唐と中唐に集中し、開催場所は北方の寺院と江南の私邸に分布し、また、参会者において僧侶と文人の間に主客関係の転化が見られ、機能と内容においては多様になることから、唐代において茶会と茶宴という二つの茶会合形式が存在していたことが確認できた。以上の分析より、喫茶文化が盛・中唐にかけて寺院から文人社会や宮廷にまで広まったという発展経緯を明らかにした。

◆栗山千香子 史鉄生の作品を翻訳中〔近況報告〕

昨春秋、史鉄生の隨筆集『記憶と印象』を翻訳出版しました（平凡社、二〇一三年九月刊）。ここには、一九五〇年代から一九七〇年代、恐れや哀しみや願いを抱えながら生きた北京の胡同の人々、あるいは文革後、生きるために思索し書き続けた作者の姿が、深い精神性と静かな抒情を湛えた文章で綴られています。原書は二〇〇四年の刊行。史鉄生の作品は日本でも一九八七年に徳間書店から短編小説集が出版されており、「わが遙かなる清平湾」「お婆さんの星」など初期のものは比較的広く読まれています。その後の作品を知る人は多くないでしょう。しかし史鉄生は、両脚の麻痺と透析治療という制約のある生活と限られた執筆時間の中で、思考を研ぎ澄まし文章を錬成し書くほどに成長した作家ですから、その成熟期の作品があまり知られていないことを残念に思っていました。それらの作品、ことに『記憶と印象』と長編小説『務虚筆記』を翻訳し日本の読者に紹介したいと長年願ってきましたので、念願の一つがかなったことになりました。

す。『務虚筆記』も形にできるよう、また少しずつ歩を進めたいと思います。

六年前から、中国現代文学と翻訳を愛する十数名の同人たちと翻訳誌『中国現代文学』（ひつじ書房）を刊行しています。ご興味がありましたら、ご連絡いただければ幸いです。

◆小島久代 沈従文著 小島久代訳
『辺境から訪れる愛の物語』について

表題書が勉強出版から二〇一三年一月二十九日ようやく刊行されました。本書に収めたのは「虹」、「月下小景」、「女人」、「扇陀」、「愛欲」、「街」、「静寂」、「夫」、「辺境の町」の九篇です。「辺境」、「月下小景」、「夫」の三篇については松枝茂夫訳の改訳を試みました。その他六篇は本邦初訳です。筆者がゼミで「辺境」の講読を始めたのは二〇〇五年頃で二〇〇八年には荒訳を仕上げ、続いて「月下小景」の四篇の訳も終えてはいましたが、実際に新訳に取り組みきつかけとなったのは、沈従文のご長男龍朱氏から思いがけず二〇一一年四月卓雅撮影選編「沈従文の湘西世界」シリーズ『辺境』、『新与旧』

『従文自伝』、『長河』（岳麓書社二〇一〇年）の四冊を贈られたことでした。沈従

文作品で描かれた湘西を写真で残しておきたいという卓雅女史の情熱に触発され、龍朱氏にお礼のメールを打つと同時に翻訳出版を決意して暫く放置していた訳文の見直しを始め、新たに「街」、「静」、「看虹録」の三篇を追加しました。沈従文の文章は文白混淆で、語法不正確、湘西方言の混じった難読なものですから、七十項目近い不明箇所については沈龍朱氏にメールでお教えを請いました。氏は弟の虎雛氏と相談しながら、時にはイラストを描いて毎回誠実且つ詳細に返信を下さいました。史有為、糜華菱、佐藤保先生にもお教えいただきました。また、『辺境から訪れる愛の物語』という些か気恥ずかしい書名は、中国文学関係者だけでなく一般の読者を取り込もうという若手編集者の意見に従いました。できるだけ平易な読み易い訳文を心がけましたが、割注が長すぎるとの指摘も受けています。ともあれ本書が沈従文の人と作品についての関心を高めることができれば

大変嬉しいですし、皆様の御指正を賜れば幸いです。